



京大広報

No. 631

2008.2



国際シンポジウム「大学における外国語教育の二つの挑戦:多言語教育と自律学習」
右上から鈴木孝夫氏, Claude TRUCHOT氏, Henri HOLEC氏
—関連記事 本文2542ページ—

目次

全学共通教育のキャンパスを見に来てください
高等教育研究開発推進機構長・副学長
北村隆行……2540

〈大学の動き〉
国際シンポジウム「大学における外国語教育の
二つの挑戦:多言語教育と自律学習」を開催
……2542
博士学位授与式……2543
平成20年度概算要求内示概要……2543
平成20年度入学者選抜学力試験(第2次学力検査)
の志願状況……2545
平成19年度定年退職予定教員……2546
総長主催「外国人研究者との交歓会」の開催
……2548
名誉教授称号授与式……2549

〈部局の動き〉
物質—細胞統合システム拠点(iCeMS)が看板除幕式
を挙げる……2549

生存圏研究所がヨーク大学地球惑星科学研究セン
ターと部局間学術交流協定を締結……2550
宇治キャンパスで新年互礼会を開催……2550

〈寸言〉
わが道・わが想い 谷口一郎……2551

〈随想〉
「役に立つ」防災研究の構築を求めて
名誉教授 亀田弘行……2552

〈洛書〉
メイン州滞在記 小林 優……2553

〈栄誉〉
柏原正樹数理解析研究所教授が日本学士院会員に
選ばれる……2554

〈日誌〉……2554
〈訃報〉……2555

〈お知らせ〉
平成19年度防災研究所研究発表講演会……2556

〈隔地施設の紹介〉
フィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所
……2557

全学共通教育のキャンパスを見に来てください

高等教育研究開発推進機構長・副学長 北村 隆行

平成3(1991)年の大学設置基準の大綱化以来、日本の大学における教養教育の実施体制は大きく変わり、各大学とも工夫を凝らしているものの実効ある教養教育には苦戦しているのが現状です。その中で、京都大学は、平成15(2003)年から全学共通教育の企画・運営に責任を持つ高等教育研究開発推進機構と実施責任部局(総合人間学部と理学部)を中心にした全学からの科目提供という独自の体制を採用しています。担当教員の努力に大学執行部のサポートも得て、これらが上手く機能しつつあります。昨年秋に国立七大学共通教育主幹部局会議に出席する機会があり、他大学から京都大学の全学共通教育の取り組みについて大いに羨ましがられました。

環境整備

まず、キャンパスの外形的紹介から始めましょう。吉田南構内を歩いていただくと、きれいになったことに驚かれると思います。現在、耐震工事も急ピッチで進んでおり、キャンパス全体が数年前とは見違える姿になっています。建物の外観だけではなく講義室や実験室も改修しており、窓が広くドラフターなどの設備が充実した新しい化学実験室は他大学から羨望される自慢の場所です。また、学生の日々の学習を支援する環境も整えています。例えば、以前は1,2回生が仲間と話をする場所もありませんでしたが、イタリア製の椅子・テーブルをおいた快適なリフレッシュルームを設け、毎日、多くの学生が利用しています。また、大学院生がTAとして学習支援をする学生用自習室を用意しています。国立大初のコンビニの導入や新進画家の絵画を展示したギャラリー等のアイデアを凝らしています。隠れたところでは、トイレはウォッシュレットです。お出でいただいたキャンパスでは、変化を体感していただけたと思います。

また、全学共通科目のあらゆる情報を Web 化し、



履修者への迅速かつ正確な情報伝達と教員等への教務支援を担うコンピュータシステム KULASIS を独自に開発しました。厳重なセキュリティ対策の下、学内外を問わずパソコン

や携帯電話から24時間アクセスできる便利なシステムです。休講等の情報の他、履修登録、採点確認ができ、多い日には1万件を越えるログインがあり、学生には不可欠のものとなっています。使う立場に立った環境整備は現代の学生気質に適合し、学習意欲向上にはとても効果的で、学生・教職員から強い支持を得ています。

京都大学の教養教育

教養は、各人が社会との関係を自覚して自ら行動する基盤であって、単なる知識ではないことはよく知られたことです。また、人生を深く楽しむ知恵でもあります。とくに、高等教育機関の大学における教養教育は、各人の将来の発展の基礎となる学術的基盤を形成することにほかなりません。京都大学の教養教育の目標は、「学生個々人が高度な学術文化との関わりにおいて自己をとらえ、真理を探究し、より深く知ろうとする心情を個々人の奥深くに醸成することを通して、高い人間性を育むこと」と謳われています。そのために、全学共通教育においては「学術的教養」「文化的言語力」「基礎的知力」の涵養を目的としています。しかし、それを実現する具体的カリキュラム構成には完全回答などなく、日々議論をしながら改良を進めてゆかねばなりません。

変革のための取り組み

全学共通教育のカリキュラムは、すべての学部と実施責任部局から選任された教員で構成される全学共通教育システム委員会において決定します。その下に4つの専門委員会があり、個々の科目について

学部のニーズを取り入れつつ、きめ細かい検討を行っています。各科目に目を光らせるだけでなく、授業評価等を実施しています。また、ゆとり教育による高校のカリキュラム変更(2006年問題)に機動的に対処するなど、状況に合わせた活動を行っています。最近の各科目の積極的な取組み例を紹介しましょう。

社会のグローバル化を背景に、学内外から外国語教育についての要求が高くなってきています。毎年泊りがけで実施している全学教育シンポジウムや卒業生のアンケートでも、英語教育向上に対する要求が強く出されました。英語担当者は真剣な議論を続け、本学の英語教育として「学術目的の英語」の考え方を創出し、カリキュラムを改訂しました。また、ケアが課題となっていた再履修者に対してもコンピュータを援用した自律学習型カリキュラム(CALL)を開発しました。これらの改革は、学生から高い評価を得ているばかりでなく、大学評価でも大きく取上げられ、全国の大学から注目されています。

また、入学する学生の実験に対する経験の薄さが問題となっていました。さらに、全学教育の実験施設の老朽化が課題となっていました。そこで、耐震改修等の機会を捉えて、施設整備とともに実験教育の改革を図りました。とくに、化学では将来を見据えた設備を導入し、ビデオを含む優れた教材開発に取り組んでいます。

今後の課題

もちろん、まだまだ問題点も数多く残っています。まず、機構の運営からは、教養教育のために借りている定員の返還等によって担当教員が数年間で大きく減少することがあげられます。全学的には色々な手当て(例えば、もっとも安易なものが、大量の非常勤講師採用)が考えられますが、教育の質の観点から困難な課題があります。

専門教育と連携させるための部局との連携も重要な課題です。とくに、文系学生の自然科学教育と理系学生の人文社会教育は、卒業後の年数を経るほど重要性が増す遅効的教育です。しっかりした基盤形成を目指す京都大学では大切な科目群ですが、とく



整備された化学実験室

に前者は現時点では十分ではありません。また、国際化に伴う留学生の教養教育についても明確な方針がありません。さらに、かなりの数にのぼる再履修者への対策も検討が必要となっています。これらはいずれも Liberal arts 教育として重要なものであり、京都大学の質の高い取組みが全国の大学をリードできるものと考えています。

一方、キャンパス整備は継続してゆかねばなりません。例えば、老朽化が著しい吉田南構内の図書館の整備があげられます。1, 2 回生の立場に立った検討をする必要があります。

機構は多くの変革を行ってきましたが、まだまだ向上の余地はあります。皆様のご意見・ご支援をいただきながら、一段、一段、上ってゆきたいと思えます。

教職協働

全学共通教育には実施責任部局だけではなく、全学の部局から多くの科目を提供していただいています。また、英語や数学をはじめとして非常勤講師の先生にも活躍していただいています。ただし、機構に所属する常勤教員は兼任の機構長・副機構長のみです。事務スタッフの努力なしでは、教養教育の不断の改革を続けつつ、約1700人の教員から約9000人の履修者への1年間約2800の講義を運営してゆくことは、不可能です。その意味では、今後の大学運営で重要となる「教職協働」が不可欠な組織であり、上記の成果はその顕著な成功例と考えています。

大学の動き

国際シンポジウム「大学における外国語教育の二つの挑戦：多言語教育と自律学習」を開催

高等教育研究開発推進機構では1月26日(土)・27日(日)の両日、芝蘭会館稲盛ホールを主会場として、「大学における外国語教育の二つの挑戦：多言語教育と自律学習」をテーマとする国際シンポジウムを開催した。

このシンポジウムは、外国語教育において英語の寡占化が進行する中で大学の外国語教育は多様性を安定的に確保し、多言語教育を供給する場として重要な役割を占めていること、また、知識社会の発展は外国語学習者に自律性を求め、この自律性こそは制度的な制約を受けた大学の外国語教育にとって発展の基盤となること、このような問題意識から開催され、海外からの参加者を含め全国から教員・学生約200人の参加を得て、開催した。

第1日目は、「多言語教育の挑戦」に当て、社会言語学者として著名な鈴木孝夫慶応義塾大学名誉教授より、これまで西洋の文物を受信することに努めてきた日本の外国語教育(とりわけ英語以外の外国語教育)における発信型の教育への転換について講演があった。続いて、Claude TRUCHOT(クロード・トリュショ)フランス ストラスブール第2・マルク・ブロック大学教授より、多言語主義をめざす大学にどのような言語政策が可能か、ヨーロッパの事例を出発点としながら、言語政策の視点から多言語教育の可能性について講演があった。これを受けて、その後のシンポジウム1「多言語教育は世界を救えるか」では、英語、アラビア語、朝鮮語教育の立場から多言語教育の意義が論じられ、戦略的理念が明ら



ワークショップで発表する張 淡江大学准教授

かにされた。シンポジウム2「大学における多言語教育の現状と展望」では多言語教育について特色ある大学の取り組みが紹介され、日本の高等教育における多言語教育の展望を開くべく議論が交わされた。

第2日目の午前中は、多言語教育を中心に5つのワークショップを構成し、その中の1つでは、張國蕾(チャン・コウレイ)台湾 淡江大学准教授より、台湾において多言語教育がどのように成功を収めつつあるか、その要諦の紹介があった。

「自律学習の挑戦」をテーマに討議した2日目の午後は、自律学習の創始者 Henri HOLEC(アンリ・オレック)フランス ナンシー第2大学名誉教授(京都大学人間・環境学研究科客員教授)より、高等教育における自律学習の重要性についてあらためて提起があり、その後『ヨーロッパ言語ポートフォリオ』での異文化(間)能力に関する自己評価項目を策定している Denise LUSSIER(ドゥニーズ・リュシエ)カナダ マギル大学教育学部教授より異文化間能力の開発と自己評価に関する提言があった。最後は「大学における自律学習の挑戦」についてのシンポジウムがあり、京都大学、北海道大学、早稲田大学、上智大学など外国語教育に自律学習を積極的に導入し、新たな展望を開きつつある事例が紹介され、パネラーを交えて、自律学習は大学の外国語教育を保証しうるものか、高度化、知識化を進める現代社会の要請に応えうるものかなどを検証した。

(教育推進部)



シンポジウム2で会場から質問する参加者

博士学位授与式

1月23日(水)午前10時30分から、時計台記念館国際交流ホールにおいて、尾池和夫総長、東山紘久理事・副学長(教育・学生担当)をはじめ、各研究科長・学舎長出席のもと、博士学位授与式が挙行された。

総長から、各授与者に対し学位記(平成19年11月26日付、同20年1月23日付)が手渡された後、総長

の式辞があり、午前11時30分に終了した。

総長式辞は総長室ホームページをご覧ください。
http://www.kyoto-u.ac.jp/uni_int/01_sou/080123_1.htm

| 学 位 | 平成19年11月 | | | 平成20年1月 | | |
|-------------|----------|------|----|---------|------|----|
| | 課程博士 | 論文博士 | 計 | 課程博士 | 論文博士 | 計 |
| 博士(文学) | 3 | 2 | 5 | 2 | 2 | 4 |
| 博士(教育学) | 2 | - | 2 | 1 | 1 | 2 |
| 博士(法学) | - | - | - | 1 | - | 1 |
| 博士(経済学) | 1 | 1 | 2 | 4 | - | 4 |
| 博士(理学) | 8 | 2 | 10 | 3 | - | 3 |
| 博士(医学) | 8 | 3 | 11 | 11 | 3 | 14 |
| 博士(社会健康医学) | - | 1 | 1 | 1 | - | 1 |
| 博士(薬学) | - | 1 | 1 | - | - | - |
| 博士(工学) | 2 | 5 | 7 | 2 | 8 | 10 |
| 博士(農学) | 7 | 3 | 10 | 5 | 4 | 9 |
| 博士(人間・環境学) | 3 | - | 3 | - | - | - |
| 博士(エネルギー科学) | 1 | - | 1 | - | 1 | 1 |
| 博士(地域研究) | - | 1 | 1 | - | 2 | 2 |
| 博士(情報学) | 3 | 1 | 4 | 2 | - | 2 |
| 博士(生命科学) | 2 | 1 | 3 | 1 | - | 1 |
| 博士(地球環境学) | - | - | - | - | - | - |
| 計 | 40 | 21 | 61 | 33 | 21 | 54 |



平成19年11月26日付 博士学位授与者



平成20年1月23日付 博士学位授与者

平成20年度概算要求内示概要

新規要求

- | | | | |
|---------------|-----------|--------|-----|
| 1. 大学院医学研究科 | 社会健康医学系専攻 | 専門職課程 | 6人 |
| 2. 大学院情報学研究科 | 知能情報学専攻 外 | 修士課程 | 21人 |
| | | 博士課程 △ | 14人 |
| 3. 大学院経営管理教育部 | 経営管理専攻 | 専門職課程 | 15人 |

4. 特別教育研究経費等
特別教育研究経費

| 区 分 | 部 局 名 | 事 項 (事 業) 名 | 備 考 |
|---------------------------|---|--|----------------------------|
| 教育改革 | 教育学研究科 | 子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究推進事業 | 継 続 |
| | 薬学研究科 | 薬学フロンティア教育プログラム開発 | 継 続 |
| 研究推進 戦略的研究推進 経費 | 化学研究所 | 超臨界二酸化炭素ナノポーラスエラストマー創製事業 | 継 続 |
| | 再生医科学研究所 | 再生医科学研究所附属幹細胞医学研究センターにおける、新たなES細胞(臨床応用用ES細胞)樹立のプロジェクト研究 | 継 続 |
| | 防災研究所 化学研究所 エネルギー理工学研究所 生存圏研究所 東南アジア研究所 | 生存基盤科学におけるサイト型機動研究の推進 | 新 規 |
| | ウイルス研究所 | 新興・再興ウイルス感染克服研究連携事業 | 継 続 |
| | 霊長類研究所 | リサーチ・リソース・ステーション(RRS) ー環境共存型飼育施設による新たな研究用霊長類創出プロジェクトー | 継 続 |
| | 地域研究統合情報センター | 地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進 | 継 続 |
| | 研究推進 大学間連携経費 | 化学研究所 | 物質合成研究拠点機関連携事業(名古屋大学,九州大学) |
| 防災研究所 | | 地震火山噴火予知計画研究事業 | 継 続 |
| 研究推進 新医療技術等 研究・開発経費 | 医学研究科 医学部附属病院 | 次世代医療技術・創薬・臨床開発プロジェクト | 継 続 |
| 拠点形成 | 生存圏研究所 | 生存圏科学ミッションの全国・国際共同利用研究拠点形成 | 継 続 |
| | 防災研究所 | 災害に関する学理と防災の総合的対策のための研究推進事業 | 継 続 |
| | 基礎物理学研究所 | 基礎物理学分野横断型全国共同研究 | 継 続 |
| | 基礎物理学研究所 | クォーク・ハドロン科学の理論研究の新たな展開を目指す国際共同研究プログラム | 継 続 |
| | 数理解析研究所 | 無限解析共同研究 | 継 続 |
| | 原子炉実験所 | 原子力科学の先導的な応用分野の開拓 | 継 続 |
| | 霊長類研究所 | 霊長類の生物学的特性の学際的研究 | 継 続 |
| | 放射線生物研究センター | 放射線生物学研究の推進拠点 | 継 続 |
| | 生態学研究センター | 生態学における共同研究 | 継 続 |
| 連携融合事業 | 医学研究科 | ポストゲノム研究の国際共同研究事業 | 継 続 |
| | 経済研究所 | 先端政策分析連携推進機構の設置 | 継 続 |
| | こころの未来研究センター | こころに関する総合的研究の推進 | 継 続 |
| 基盤的設備等整備 | 共同利用設備 | 電顕共同利用ステーション | 新 規 |

特殊要因経費〔政策課題対応経費〕

| 区 分 | 部 局 名 | 事 項 (事 業) 名 | 備 考 |
|----------|----------------|---|-----|
| 政策課題対応経費 | 高等教育研究開発推進センター | 大学教員教育研修のためのモデル拠点形成 | 新 規 |
| | 医学研究科 | ゲノム疫学コホート事業 ー滋賀県長浜市をモデルとした0次予防による健康づくりを目指してー | 新 規 |
| | 教育推進部 | 9月入学支援経費 | 新 規 |

※特別教育研究経費として概算要求を行ったプロジェクトの中から、いわゆる骨太の方針などに掲げられた政策課題に対応するものとして措置されるもの等

特殊要因経費〔附属病院機能強化経費〕

| 区 分 | 部 局 名 | 事 項 (事 業) 名 | 備 考 |
|------------|---------|-------------|-----|
| 附属病院機能強化経費 | 医学部附属病院 | 附属病院機能強化経費 | 新 規 |

国立大学財務・経営センター施設費貸付事業

| 区 分 | 部 局 名 | 事 項 (事 業) 名 | 備 考 |
|-------------|---------|----------------|-----|
| 病院特別医療機械整備費 | 医学部附属病院 | 光学医療診断治療システム | 新 規 |
| | 医学部附属病院 | 核医学画像総合診断システム | 新 規 |
| | 医学部附属病院 | 超音波診断治療支援システム | 新 規 |
| | 医学部附属病院 | リニアック放射線治療システム | 新 規 |

(財務部)

平成20年度入学者選抜学力試験(第2次学力検査)の志願状況

2月25日(月)～27日(水)および3月12日(水)に実施される平成20年度入学者選抜学力試験の志願状況は以下のとおりです。

志願票の受付は、1月28日(月)から2月6日(水)まで、各学部で行われました。

| 学 部 | | 募集人員 | 志願者数 | 倍 率 | (参考) 前年度最終 | | |
|---------|----|------------------|------------------|-----|------------------|------------------|-----|
| | | | | | 募集人員 | 志願者数 | 倍 率 |
| 総合人間学部 | 前期 | 120 [^] | 432 [^] | 3.6 | 120 [^] | 393 [^] | 3.3 |
| | 文系 | 65 | 226 | 3.5 | 65 | 241 | 3.7 |
| | 理系 | 55 | 206 | 3.7 | 55 | 152 | 2.8 |
| 文学部 | 前期 | 220 | 651 | 3.0 | 220 | 629 | 2.9 |
| 教育学部 | 前期 | 60 | 207 | 3.5 | 60 | 205 | 3.4 |
| | 文系 | 50 | 176 | 3.5 | 50 | 178 | 3.6 |
| | 理系 | 10 | 31 | 3.1 | 10 | 27 | 2.7 |
| 法学部 | 前期 | 320 | 791 | 2.5 | 320 | 867 | 2.7 |
| 経済学部 | 前期 | 230 | 803 | 3.5 | 230 | 814 | 3.5 |
| | 一般 | 180 | 585 | 3.3 | 180 | 512 | 2.8 |
| | 論文 | 50 | 218 | 4.4 | 50 | 302 | 6.0 |
| 理学部 | 前期 | 311 | 865 | 2.8 | 311 | 812 | 2.6 |
| 医学部 | 前期 | 223 | 624 | 2.8 | 223 | 604 | 2.7 |
| | 後期 | 20 | 166 | 8.3 | 20 | 146 | 7.3 |
| 医学科 | 前期 | 100 | 321 | 3.2 | 100 | 344 | 3.4 |
| 保健学科 | 前期 | 123 | 303 | 2.5 | 123 | 260 | 2.1 |
| | 後期 | 20 | 166 | 8.3 | 20 | 146 | 7.3 |
| 看護学専攻 | 前期 | 63 | 149 | 2.4 | 63 | 122 | 1.9 |
| | 後期 | 7 | 60 | 8.6 | 7 | 47 | 6.7 |
| 検査技術専攻 | 前期 | 30 | 85 | 2.8 | 30 | 74 | 2.5 |
| | 後期 | 7 | 51 | 7.3 | 7 | 51 | 7.3 |
| 理学療法専攻 | 前期 | 15 | 42 | 2.8 | 15 | 37 | 2.5 |
| | 後期 | 3 | 29 | 9.7 | 3 | 19 | 6.3 |
| 作業療法専攻 | 前期 | 15 | 27 | 1.8 | 15 | 27 | 1.8 |
| | 後期 | 3 | 26 | 8.7 | 3 | 29 | 9.7 |
| 薬学部 | 前期 | 80 | 231 | 2.9 | 80 | 223 | 2.8 |
| 薬科学科 | | 50 | 143 | 2.9 | 50 | 113 | 2.3 |
| 薬学科 | | 30 | 88 | 2.9 | 30 | 110 | 3.7 |
| 工学部 | 前期 | 955 | 2401 | 2.5 | 955 | 2221 | 2.3 |
| 地球工学科 | | 185 | 491 | 2.7 | 185 | 464 | 2.5 |
| 建築学科 | | 80 | 224 | 2.8 | 80 | 190 | 2.4 |
| 物理工学科 | | 235 | 498 | 2.1 | 235 | 522 | 2.2 |
| 電気電子工学科 | | 130 | 299 | 2.3 | 130 | 267 | 2.1 |
| 情報学科 | | 90 | 216 | 2.4 | 90 | 225 | 2.5 |
| 工業化学科 | | 235 | 673 | 2.9 | 235 | 553 | 2.4 |
| 農学部 | 前期 | 300 | 796 | 2.7 | 300 | 634 | 2.1 |
| 合 計 | | 2839 | 7967 | 2.8 | 2839 | 7548 | 2.7 |
| | 前期 | 2819 | 7801 | 2.8 | 2819 | 7402 | 2.6 |
| | 後期 | 20 | 166 | 8.3 | 20 | 146 | 7.3 |

(注) 法学部と経済学部(一般)の募集人員は、外国学校出身者のための選考各10名以内を除く。

(学生部)

平成19年度定年退職予定教員

京都大学定年規程により、次の教員(教授46人、准教授5人、講師1人、助教11人)が、本年3月31日付で退職の予定です。

| 部 局 | 氏 名 | 講 座 等 | 研 究 分 野 等 |
|--------|---------------------------------|--------------------------------|--|
| 文学研究科 | 徳永宗雄 | 文献文化学専攻 東洋古典学講座 | 古代インド神話伝説文献、とりわけ『プリハッド・デーヴァター』と『マハーバーラタ』の文献学的研究 |
| 〃 | 片柳榮一 | 思想文化学専攻 哲学・宗教学講座 | 古代基督教思想史、殊にアウグスティヌスにおける三一神論、および神の似像としての三一の人間精神論の研究 |
| 教育学研究科 | 藤原勝紀 | 臨床教育学専攻 臨床実践指導学講座 | 臨床イメージに関する心理臨床学的研究、心理臨床家の教育訓練及び臨床実践指導者養成に関する研究 |
| 法学研究科 | 西村健一郎 | 法政理論専攻 社会法講座 | 社会保障法及び労働法に関する法理論的研究 |
| 〃 | 櫻田嘉章 | 法政理論専攻 国際関係法講座 | 国際私法及び国際民事手続法に関する法理論的研究 |
| 経済学研究科 | 下谷政弘 | 現代経済・経営分析専攻 現代経済学講座 | 企業統括組織および企業間関係の歴史的変遷に関する研究 |
| 理学研究科 | 齋藤軍治 | 化学専攻 相関化学講座(有機物性化学) | 有機導電体(半導体・金属・超伝導体)の物性化学 |
| 〃 | 今福道夫 | 生物科学専攻 自然史学講座 | 無脊椎動物の行動の研究 |
| 〃 | 松柳研一 | 物理学・宇宙物理学専攻 核物理学講座(核多体系物理学) | 原子核構造論：特に、高速回転、巨大変形、束縛限界などの極限状況における集団現象の微視的理論 |
| 医学研究科 | 野村 巖 | 人間健康科学系専攻 理学療法学講座 | 運動・感覚機能を中心とした神経解剖学および人の運動機能解剖学 |
| 〃 | 野間昭典 | 医学専攻 生体制御医学講座 | 心筋の生理学的機能に関する研究や細胞機能のコンピュータシミュレーション解析に関する研究 |
| 〃 | 天野 殖 | 人間健康科学系専攻 医療検査展開学講座 | 実験動物(イハラてんかんラット)を用いたてんかんの遺伝的研究並びに神経病理学的研究。人体の神経病理学的研究 |
| 薬学研究科 | 秋元直茂 | 創薬科学専攻 薬品創製化学講座 | 質量分析による天然生理活性物質の構造解析に関する研究 |
| 工学研究科 | 前田忠直 | 建築学専攻 建築設計学講座 | 生活空間設計学分野、ルイス・カーンの建築論的研究、20世紀の建築作品における生成論的研究、建築設計の実践的研究 |
| 〃 | 東谷 公 | 化学工学専攻 化学工学基礎講座 | 液相微粒子挙動の基礎と応用に関する研究、固液界面マイクロ構造に関する研究、原子間力顕微鏡の基礎と応用に関する研究 |
| 〃 | 松本 勝 | 社会基盤工学専攻 構造工学講座 | 長大橋の耐風安定化、連成フラッター機構解明、ケーブルの空力振動機構解明、自励振動とカルマン渦の関係 |
| 〃 | 増田俊夫 | 高分子化学専攻 先端機能高分子講座 | 高分子合成および機能性高分子、特に置換ポリアセチレン、遷移金属触媒重合、気体分離膜等に関する研究 |
| 〃 | 渡邊史夫 | 建築学専攻 建築構法学講座 | せん断理論と靱性確保理論に基づいたコンクリート系構造物の耐震設計 |
| 〃 | SCAWTHORN CHARLES RAYMOND | 都市社会工学専攻 ライフライン工学講座 | 地震を中心とした自然災害リスクマネジメントの研究 |
| 〃 | 今中忠行 | 合成・生物化学専攻 生物化学講座 | 極限環境微生物の探索と利用、および環境バイオテクノロジーに関する生物工学的研究 |
| 〃 | 田村剛三郎 | 材料工学専攻 材料物性学講座 | 超臨界金属流体の構造と物性、および液体半導体の光誘起現象に関する研究 |
| 〃 | 木下知己 | 物質エネルギー化学専攻 基礎物質化学講座 | 炭化水素イオンの構造および反応の化学、環境安全化学ならびに化学物質管理学に関する研究 |
| 〃 | 伊藤義勝 | 合成・生物化学専攻 有機設計学講座 | 有機光化学を基盤とする研究 |
| 〃 | 野島武敏 | マイクロエンジニアリング専攻 構造材料強度学講座 | 衝撃塑性および破壊力学に関する研究、折りたたみ及び超軽量構造の開発に関する研究 |

| 部 局 | 氏 名 | 講 座 等 | 研 究 分 野 等 |
|-------------------------------|-----------|---------------------------|---|
| 工 学 研 究 科 | 松 本 忠 生 | 都市環境工学専攻 環境デザイン工学講座 | 循環型社会における適正な廃棄物管理システムに関する研究 |
| 〃 | 久 保 寔 | 電子工学専攻 電子物理工学講座 | 放電プラズマの基礎, 計測および応用に関する実験的研究, 特に光源に係るプラズマを中心として |
| 農 学 研 究 科 | 山 田 利 昭 | 附属農場 | イネ, コムギ, ダイズ等主要な農作物についての遺伝・育種学的研究 |
| 〃 | 吉 川 正 明 | 食品生物学専攻 食品健康科学講座 | 食品の生体調節機能に関する研究 |
| 〃 | 藤 田 稔 | 森林科学専攻 生物材料機能学講座 | 多様な顕微鏡法とフーリエ変換画像処理法を用いた樹木の生理, 細胞壁形成, 木材利用などの研究 |
| 〃 | 吉 田 昌 之 | 生物資源経済学専攻 国際農林経済学講座 | 森林・林業・木材関連産業に関する計量的研究 |
| 〃 | 山 末 祐 二 | 農学専攻 耕地生態科学講座 | ヒエ属植物における適応分化の生態生理的機構に関する研究 |
| 〃 | 高 藤 晃 雄 | 地域環境科学専攻 生産生態科学講座 | ハダニ類および捕食性カブリダニに関する個体群生態学的研究 |
| 〃 | 西 岡 孝 明 | 応用生命科学専攻 生物機能化学講座 | 生物有機化学に関する研究 |
| 〃 | 森 田 勝 子 | 地域環境科学専攻 比較農業論講座 | 比較農業論分野を中心とした国際理解教育のグローバルネットワーク化に関する研究 |
| 人 間 ・ 環 境 学 科 研 究 科 | 四 日 谷 敬 子 | 共生人間学専攻 思想文化論講座 | アリストテレス, 中世スコラ, 17世紀大陸合理論, ドイツ観念論, ハイデッガーの哲学・美学の研究 |
| 〃 | 丹 羽 隆 昭 | 共生人間学専攻 思想文化論講座 | ナサニエル・ホーソーンを中心とする十九世紀アメリカ・ロマン主義文芸の研究 |
| 〃 | 木 村 崇 | 共生文明学専攻 比較文明論講座 | ロシア文学, ロシア文化, 日露文化交渉に関する研究 |
| 〃 | 湯 山 哲 守 | 相関環境学専攻 物質相関論講座 | プラズマ物理学の分野における高温電子群に関する研究 |
| エ ネ ル ギ ー 科 学 研 究 科 | 福 中 康 博 | エネルギー応用科学専攻 資源エネルギー学講座 | 微小重力や強磁場下の非平衡電気化学プロセッシングとナノ構造太陽水素エネルギー変換貯蔵デバイスの基礎研究 |
| ア ジ ア ・ ア フ リ カ 地 域 研 究 研 究 科 | 掛 谷 誠 | アフリカ地域研究専攻 地域生態論講座 | アフリカ農耕民の生態・社会・文化の相互関係と動態を中心とした地域研究 |
| 化 学 研 究 所 | 岡 穆 宏 | 生体機能化学研究系 | 遺伝子の構造, 機能および発現調節機構に関する研究 |
| 〃 | 堀 井 文 敬 | 環境物質化学研究系 | 天然および合成高分子の構造, 構造形成並びに構造制御に関する研究 |
| 〃 | 池 田 靖 訓 | 物質創製化学研究系 | 多元素系無機酸化物の固相反応と平衡状態図的研究 |
| 〃 | 喜 多 保 夫 | 複合基盤化学研究系 | 物質の電気的性質に関する研究 |
| 再 生 医 科 学 研 究 所 | 堤 定 美 | 附属ナノ再生医工学研究センター | 生体組織の力学的挙動に関するシミュレーション工学的研究 |
| 防 災 研 究 所 | 岩 嶋 樹 也 | 気象・水象災害研究部門 | 大気大循環・気候環境・大気微量成分に関する研究 |
| 〃 | 鈴 木 祥 之 | 社会防災研究部門 | 安全・安心なまちづくりのための都市空間・建築物の耐震技術の開発と方法論に関する研究 |
| 〃 | 伊 藤 潔 | 防災研究所附属地震予知研究センター | 地震予知を目的とした地震発生過程解明のための地震活動・地下構造の研究 |
| 〃 | 松 村 一 男 | 防災研究所附属地震予知研究センター | 地震活動の時空間分布の研究 |
| 〃 | 中 村 佳 重 郎 | 防災研究所附属地震予知研究センター | 重力の時間変化・空間分布に関する研究 |
| 〃 | 尾 上 謙 介 | 防災研究所附属地震予知研究センター | 地殻変動連続観測データの地震発生に関わる地殻ひずみ変動の解明による地震予知の研究 |

| 部 局 | 氏 名 | 講 座 等 | 研 究 分 野 等 |
|--------------------|---------|-------------------------|---|
| 基礎物理学 研 究 所 | 二 宮 正 夫 | 物理学基礎研究部門 | 素粒子の統一理論としての超弦理論の研究, 素粒子論 的超初期宇宙論の研究 |
| 経 済 研 究 所 | 塚 谷 恒 雄 | 経済情報解析研究部門 | 中央アジアの政治経済, 水資源およびエネルギー資源 に関する研究 |
| 数理解析研究所 | 齋 藤 恭 司 | 無限解析研究部門 | 原始形式の研究 |
| 〃 | 河 合 隆 裕 | 応用数理研究部門 | 代数学解析の研究 |
| 原子炉実験所 | 丸 橋 晃 | 放射線生命科学研究部門 | 中性子捕捉療法を中心とした総合的軽粒子(中性子と 陽子等)線治療の展開と普及に関する基盤研究 |
| 〃 | 福 井 正 美 | 原子力基礎工学研究部門 | 原子力施設および自然環境における放射能安全に関す る研究 |
| 〃 | 中 村 博 | 原子力基礎工学研究部門 | 原子炉の安全管理 |
| 霊長類研究所 | 浅 岡 一 雄 | 分子生理研究部門 (遺伝子情報研究分野) | 公害物質・添加物・農薬・医薬など環境化学物質の霊長 類における生体影響および解毒代謝の分子生化学的研究 |
| 生態学研 究セ ンター | 清 水 勇 | 生態学研究部門 | 動物の環境適応に関する分子生態学的研究 |
| 放射性同位元素 総合センター | 倉 橋 和 義 | | 神経再生に関する研究, 細胞内蓄積機構の数学的モデル に関する研究及び内皮細胞の動脈収縮因子に関する研究 |
| 低温物質科学 研究センター | 伊 藤 忠 直 | 学際低温応用研究分野 (分子生物物理学) | 細胞骨格, 細胞膜などの生体超分子構造体の示す物理 化学的性質と生体機能との関連の研究 |
| 国 際 交 流 セ ン タ ー | 村 瀬 哲 司 | | 国際金融論, 特に欧州の通貨統合の歴史を参考に, ア ジアでの通貨・金融協力のあり方についての研究 |

総長主催「外国人研究者との交歓会」の開催

平成19年12月21日(金)午後6時から、時計台記念館国際交流ホールで、外国人研究者との交歓会が開催された。このイベントは総長が主催するもので、教育・研究に携わっている外国人研究者と総長、副学長、部局長をはじめとする本学教職員との交流を深めることを目的として、年に1度開催されており、今年度は、前年度を上回る約220人が出席した。

交歓会では、横山俊夫国際交流推進機構長の司会により、尾池和夫総長の挨拶、松本 紘理事・副学長の乾杯の発声の後には、談笑の輪が広がり、後半では、外国人研究者を代表して生態学研究センター外国人研究員の Mouringh Willem Sabelis 氏、生存圏研究所講師(研究機関研究員)の Thi Thi Nge 氏、工学研究科外国人共同研究者の Sujit Kumar Ghosh 氏及び人間・環境学研究科外国人研究員の Henri

Holec 氏から挨拶があった。閉会にあたって、西村周三理事・副学長の挨拶があり、盛会のうちに散会した。



交歓会の様子

(国際部)

名誉教授称号授与式

平成19年12月21日(金)の午前10時から総長応接室において木谷雅人理事・副学長，高林純示生態学研究センター長の出席のもとに名誉教授称号授与式が挙行され，尾池和夫総長から山村則男元教授(生態学研究センター)に称号が授与された。



名誉教授の称号を授与される山村元教授(右)

(総務部)

部局の動き

物質－細胞統合システム拠点(iCeMS)が看板除幕式を挙行

平成19年10月1日付けで物質－細胞統合システム拠点(iCeMS(アイセムス))が「世界トップレベル研究拠点(WPI)」の一つとして本学に設置され，同年12月20日(木)に同拠点の拠点長室や事務部が入居する建物(東大路通近衛東北角)の看板除幕式が，尾池和夫総長，中辻憲夫拠点長ほか多くの関係者出席のもと行われた。



iCeMS のロゴマーク

除幕式に続いて拠点職員の案内により，尾池総長ほか関係者が改装なった建物内を見学した。

なお，式典は拠点の運営方針のもと英語を用いて行われた。



関係者による看板の除幕

(物質－細胞統合システム拠点)

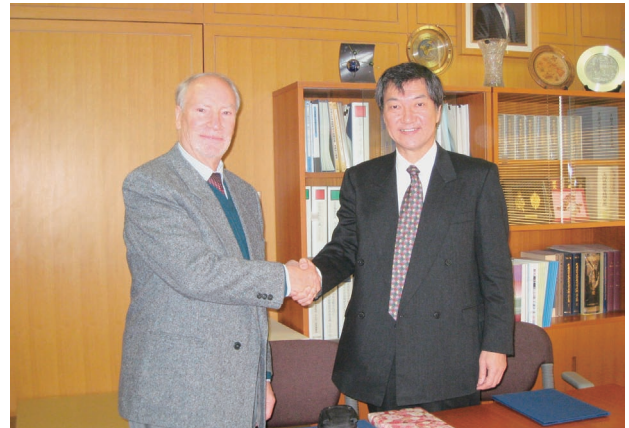
生存圏研究所がヨーク大学地球惑星科学研究センターと部局間学術交流協定を締結

平成19年12月20日(木)に生存圏研究所で、川井秀一生存圏研究所長と Gordon G. Shepherd ヨーク大学地球惑星科学研究センター長により部局間学術交流協定の調印式が行われた。Shepherd センター長は、平成19年9月から12月まで生存圏研究所に招へい外国人学者として来日していた。

ヨーク大学は49年前に設立されたカナダで3番目に規模の大きな総合大学。学部は11あり、学生は50,000人。同センターはヨーク大学で最初の地球惑星科学分野の研究組織として1965年に設立された。

津田敏隆生存圏研究所副所長と Shepherd センター長が中心となり中間圏・下部熱圏の構造と大気力学過程に関する共同研究に従事してきた。その実績を踏まえて協定の締結に至ったものである。

同協定の締結により、これまで京都大学から参加できなかった「GPSによる大気観測」や「高高度気球による水蒸気・エアロゾル・気温計測実験」等のプロジェクトにヨーク大学の尽力により参加が可能と



Shepherd センター長(左)と川井所長

なるという貴重な利点を得、またヨーク大学は生存圏研究所が所有する機器の利用が可能となる。

両機関は、今回の調印により、包括的な協力関係を築いていくことになる。新たな共同研究やシンポジウムの実施、人物交流等を通して、学術研究の推進と教育活動の強化を図っていく予定である。

(生存圏研究所)

宇治キャンパスで新年互礼会を開催

宇治地区では1月4日(金)午後3時から、生存圏研究所木質ホールで新年互礼会が開催された。宇治キャンパス各部局の連携促進と構成員の交流を深めることを目的に、昨年からの仕事始めの日に開かれることになり、本会は今年で2回目の実施となる。

まず、開会の辞として、宇治地区部局長会議世話部局長である石原和弘防災研究所長の挨拶の後、宇治キャンパス担当の松本 紘理事・副学長から、耐震改修工事中での教育・研究活動等を行う構成員に激励の言葉があり、今後も積極的に各部局間の連携を深めるよう挨拶があった。

引き続き、次期宇治地区部局長会議世話部局長の川井秀一生存圏研究所長の発声による乾杯の後、約100人の出席者が和やかに懇談し、会場では新年を

迎えた実感と賑やかな雰囲気の中、盛会のうちに閉会となった。



新年の挨拶を述べる松本理事・副学長

(宇治地区事務部)

寸言

わが道・わが想い

谷口 一郎



昭和30年春入学。今でも偶に夢をみて冷汗をかくことがある。入試前日の3月2日、時計台前で入試要領の案内板を見た後、受験場所の理学部数学科教室まで行き実地確認も完全にした。当日3月3日厳しい寒さの中、8時過ぎから時計台前で、案内係が来て受験教室まで誘導してくれるものと思ひ込み、ひたすら待ち続けたが、あまり受験生が集まるでもなくただ時間が過ぎて行く。はや定刻の10分前も過ぎ、最早これまでとやおら脱兎の如く全力疾走、教室に滑り込んだ時に既に試験用紙の配布が始まっていた。全身汗まみれで真に茫然自失、恐らく顔面蒼白、目は虚ろの状況が相当長く続いたと思う。生来の臆病、慎重者が途方もない間抜けな誤解を仕出かしたものであった。慎重さが昂じて頑固一徹・融通の効かぬ性癖は今以って相変わらずである。

初日第一科目でこの様でてっきり駄目と観念したが、縁と運があったのか入学以降は良い環境と、立派な先生方、諸先輩、同僚友人達、後輩の皆様方に支えられ、誠に有意義で楽しい学生生活を過ごすことができ、ただただ感謝あるのみである。ただ事情があって、神戸でアルバイト、片道2時間以上の通学などで、部活動(文・体共)に入って精進できなかったことが今となっては大変悔やまれてならない。それでも体育の先生から筋が良いからテニス部へ、学部対抗野球試合の後で野球部選手から入部の勧誘を受けたり中々愉快的思い出が懐かしい。同期仲間とは下宿や純喫茶で長時間議論したり、寺社廻り、山登り、展覧会、小旅行など楽しい思い出が盡きないが、やはり学生青春時代の特権でもあったろう。

思い起こせば入学年は戦後わずか10年目。贅沢を不問にすれば、最低限普通の生活ができるレベルが得られ始めた頃であった。衣は4年間学生服で通せし、住は京都の夏の暑さ、冬の底冷えの迫る教室に辟易するも病に侵されることなく、食は材料と味を我慢すれば紙のように透けたハムや豚カツ定食を学食でいただいた。ただ未だ配給製の名残で外食券を使っていたことを思い出す。時々1杯のコーヒーで数時間も居座ってクラシックを楽しんだりして、平均1日100円以内の食費で生活していた京都の生活は、誠に学生にとって住み心地の良い街であり、

人々は学生さんに親切であった。

大学受験前に自分の将来像を描き切れず、唯物理や数学を勉強してゆきたいという理由で理学部を選択した。単純で純真であった。在学中に少しは成長したのか、社会に貢献できること、将来の生活設計も思いをめぐらし始めた(普通の大人としては遅咲きの誹りを免れぬ)。諸般の事情を考慮した上、企業に就職することに決めたが、最終的で最大の要因は眩いばかりの我が同期の俊才たちの存在であった。物理学の研究分野でとても彼等友人には敵わない、彼等こそ物理学者として天職を全うしてもらいたい、自分は自分の道を切り開いて行こうと決心した。結果的にはまったく正しい選択をした訳で、彼等にその存在と巡り合えたことに深く感謝している。

三菱電機(株)に入社以来、中央研究所で主にレーザの研究・応用開発、電子システム事業本部・製作所等でレーザ・光応用機器、産業・防衛・宇宙・通信等の電子応用システム・機器の開発生産のマネジメントに従事してきたが、社会に貢献する会社の仕事をただただ一心不乱に全力を盡くしてきた自負はある。しかし、会社生活が必ずしも順風満帆であった訳ではなく、課長・部長・所長級への昇任・昇格も決して早くはなかったが、一向に気にならなかった。仕事のテーマ・進め方・計画立案等の規範はあくまで会社・顧客・社会に如何に貢献できるかであり、要所での直言は惜しまなかった。拾う神ありということで社長就任となったが、全くの偶然であり自身運命論者である。ただ最初の会見で「国家・社会に貢献する会社であり続けたい」と抱負を述べたが、メディアは既に米国流株主優先主義の時流の真最中で何の関心も示さなかった。

さて今日本の将来の持続的大発展のためにイノベーション推進の大合唱であり、その根幹をなすのは科学技術イノベーションとされ、主課題は教育・人材育成と産学官連携である。問題点は概ね明らかになっているが、革新的解釈・対策案と実施は今後に待たねばならない。就中、前者については高等教育(大学・院・博士課程・ポスドク)に主点が置かれているが、学力・知力・体力は勿論のこと理力(理、道理、倫理、理学)にも力点を置いた初・中等教育課程の徹底的な見直しと家庭教育の再構築が望まれると思惟する。

「イノベーション25」目標に向けて若い学生の皆様や先生方の英知を結集していただくことを期して止みません。

(たにぐち いちろう 三菱電機株式会社 相談役 昭和34年理学部卒)

随想

「役に立つ」防災研究の構築を求めて

名誉教授 亀田 弘行

京都大学を辞職して6年近くの時間が流れた。定年まで1年を残して防災研究所を辞し、兼任で務めていた防災科学技術研究所地震防災フロンティア研究センター(EDM/所在地神戸)のセンター長に専念したのであるが、その目的は、「役に立つ」防災研究の場を形成すること、そのために真の意味で多分野の共同研究を推進することであった。

きっかけは1995(平成7)年に発生した阪神・淡路大震災の惨状である。この時の研究者の姿勢は2つに分極化したと思う。一方は、この災害を既往の自己の専門に引き比べ大きな問題なしとわかれば(そういたいという意識を含め)ひと安心し、他方は、この災害の事実を直視し自己の専門のあり方に疑問を投げて模索を始めた。

筆者は、願わくは後者でありたいと考えた。京大大学在職35年のうち、震災前の28年と比べて、震災後の7年を持つ意味は計り知れないほど大きい。その思いは、EDMのセンター長も辞して、いくつかの研究プロジェクトの責任を果たしている現在まで続いている。

阪神・淡路大震災の最大の教訓は、日本のように優れた耐震技術を持つとされた先進工業国で、「優れた耐震技術を持つ」と「社会の安全」の間に深い溝が横たわる事実を認識させたことである。この溝を埋めるのに役立つ貢献なしには防災研究者の責任を果たしているとは言えないことを、防災研究を志す者は肝に銘ずべきである。私にとっては、「役に立つ」防災研究への模索の連続であった。

これは日本だけでなく世界で共有すべき課題でもある。震災以後、筆者が特に力を注いだ研究プロジェクトは、科学技術振興調整費多国間型国際共同研究(EqTAPプロジェクト：平成11-15年度)、国連防災世界会議でのテーマ別会合の運営(2005(平成17).1)、科学技術振興調整費「アジア防災科学技術



情報基盤の形成(DRHアジア)」(Phase I：平成17年度、Phase II：平成18-20年度)などの国際枠組であった。これら活動の記録はすべて <http://www.edm.bosai.go.jp/old/m-n.html> からダウンロードできる。

ここから生まれた2つの重要な論点を提起したい。簡単な記述であるが決して言葉の遊びでなく、徹底した現場主義から育ったものであることを強調したい。

①「技術」の概念の再構築：

EqTAPプロジェクトは、防災研究における「現場への適用戦略(Implementation strategy)」という規範を打ち出した。これを発展させたDRHアジアプロジェクトでは、『役に立つ防災技術を構成する内容は、1)現場への適用戦略を持つ科学技術、2)プロセスの技術、3)地域に根ざして発達し他地域へも広く適用可能な防災の知恵の総合体系からなる』として、その知識ベース Disaster Reduction Hyperbase - Asian Application (DRH-Asia) を構築中である。

②「現場への適用戦略」を軸とする防災研究の変革：

防災に役立つ技術を形成する「もの」、「プロセス」、「知恵」がトータルに伝えられてはじめて、社会の安全に役立つ。これは、防災研究者と防災研究コミュニティの変革を促すものであり、これを支える国の科学技術政策の変革をも促している。いつの日か、自然災害科学に係る科学研究費補助金の評価項目に「現場への適用戦略」がその場所を占めることを希っている。

思えば、私の辿った研究の軌跡は決して一筋の道を貫くというような立派なものではなく、多くの事実学び、人から学び、ここまで到達した、というのが実感である。紹介したプロジェクトを含め、今も志を共にし、活動を共にする研究仲間が京都大学に健在である。大学の公式行事にはご無沙汰ばかりの昨今であるが、私を育ててくれた京都大学への感謝の念が止むことはない。

(かめだ ひろゆき 平成14年退官 元防災研究所教授、現防災科学技術研究所客員研究員、専門はライフライン地震工学、防災情報システム論、防災科学技術論)

洛書

メイン州滞在記

小林 優

メイン州はアメリカ合衆国ニューイングランド地方の北端にあり、カナダと国境を接する州である。州面積の8割以上は針葉樹林に覆われ、氷河侵食の名残である大小の湖沼と入り組んだ海岸線など豊かな自然を残している。日本では比較的馴染みの薄い州だと思うが、アメリカ人にとっても、どこか非日常的で不思議なイメージを与える土地らしい。筆者はそのメイン州に2003年からの2年間研究留学する機会を与えられた。帰国して既に3年近く経過した現在では今更の感が無くもないが、メイン滞在にまつわる思い出等を記し「洛書」とさせていただきたい。

メインといってまず思い出すのは冬の厳しさである。筆者が滞在したブランズウィック市は州南部の海沿いにあるため内陸部ほどには寒くない筈だが、それでも最低気温 -20°C 、体感気温では -30°C に至る日もあって「鼻毛も凍る寒さ」を体験できる。それだけにメイン人の夏にかけける意気込みは並々ならぬものがあり、7月ともなれば「ビーチ行った？」が挨拶がわりとなる(とはいえ、大西洋の水は日本人が泳ぐには冷たすぎるが)。しかし筆者はメインは秋が最も美しいと思っている。日本の繊細な紅葉とは一味違い、大ぶりで色鮮やかなもみじ葉が青空に映える様子はゴージャスの一語に尽きる。

訪問先の Bowdoin College もそんな美しい環境の中にある。ブランズウィックの街中に位置するキャンパスは概ね京都大学の吉田地区キャンパスと同程度の面積であり、アメリカの大学としては特に広大な敷地というわけではない。しかし建物面積は吉田地区の3分の1以下しかなく、キャンパスの風景にはゆとりが感じられる。建物の大部分はニューイングランド風の赤煉瓦で作られ、緑の芝生に映えて絵のように美しい。Bowdoin は東海岸地域に多いリベラルアーツ・カレッジの一つである。同種の大学としては全米でも上位10校に入る有力校なのだが、少なくとも自然科学分野に関する限り、日本での知

名度は高くないようだ。筆者は帰国後「Bowdoin に滞在していました」といって話が通じたためしがないが、おそらくリベラルアーツ・カレッジそのものが日本ではあまり知られていないことによるのだろう。

リベラルアーツ・カレッジは人文・社会・自然科学にわたる幅広い教養を修得させることを目的とした4年制大学で、通常大学院は設置されていないが、卒業生の多くが総合大学の大学院やメディカルスクール・ロースクール等の専門職大学院へ進学する。筆者は生物学科の Bruce D. Kohorn 教授のもとで植物の「細胞壁結合受容体型キナーゼ」の研究に取り組んだ。ラボは Kohorn 教授とテクニシャン、ポスドク(筆者)各1名、学部学生3~4名の小さなユニットであった。自らも実験科学者で有り続けるため“small laboratory”を維持するのが Kohorn 教授の方針であり、筆者も落ち着いた雰囲気の中じっくりと研究を進めることができた。



Bowdoin College のキャンパス風景

日本の科学技術力や研究環境が欧米並みかそれを凌ぐほど向上した現在、海外へ「留学」することが果たして必要なのか、と問う声もある。筆者の場合も、実験機器や設備に関しては日本のラボのほうが上だったし、知識や技術の修得という面だけに限ればわざわざ海外へ行くことはなかったかもしれない。とはいえ「留学」の意義はもちろんそれだけではないだろう。とりわけ Kohorn 教授をはじめメインで出会った人達との関係は、メインを訪れてこそ築けた大きな財産である。早くアメリカへ送り出してくれた日本のポス、メインでの日々の暮らしを支えてくれた家族に感謝し、この稿を終えることにする。

(こばやし まさる 農学研究科准教授、専門：植物栄養学)

栄誉

柏原正樹数理解析研究所教授が日本学士院会員に選ばれる

このたび、柏原正樹数理解析研究所教授が日本学士院会員に選ばれました。
以下に同教授の略歴、業績等を紹介します。

柏原 正樹教授は、昭和44年5月東京大学理学部を卒業、同46年3月同大学理学系研究科数学専門課程修士課程を修了後、同46年4月京都大学数理解析研究所助手、同49年4月名古屋大学理学部助教授、同53年9月京都大学数理解析研究所助教授を経て、同59年4月に教授に昇任、現在に至っている。この間、平成13年から2年間、さらに同19年4月より数理解析研究所所長を務めている。



柏原教授は1970年代から現在まで、世界的な中心として代数解析学の革新と発展、その応用を主導してきた。同教授によるD加群の理論とその表現論への応用は、現代数学の中に大きな流れを作り出している。

代数解析学の対象は、関数とそれが満たす方程式である。代数幾何学が図形を代数方程式系の解として研究するのに対し、代数解析学は関数を微分方程式系の解として研究する。

同教授の最初の仕事は、佐藤幹夫氏(本学名誉教授)、河合隆裕氏(数理解析研究所教授)との共同での線形偏微分方程式系の分類理論の完成であった。ここでは、関数の特異性を超局所的に分解するという革新的なアイデアが用いられた。これは、波動を三角級数に分解するという Fourier のアイデアに比

肩し得る解析学の革新である。

続いて、同教授は河合氏と共同で、複素1変数の微分方程式論の基本的道具立てである確定特異点型の方程式の多変数への拡張を目指し、D加群の理論を構築した。同教授はその応用として、リーマン・ヒルベルト対応の高次元化に成功した。関数の性質はその特異点に集約され、特異点での関数の性質は、関数の満たす方程式の特異点を調べることによって解析されるというのがリーマンのアイデアである。同教授はこのアイデアを高次元化した形で現代数学に甦らせた。これにより代数解析学とD加群の理論は、線形偏微分方程式論を越えて、現代数学の基本的な手段としての位置付けを得た。

Brylinski 氏との同教授による Kazhdan-Lustzig 予想の解決には多様体と表現論(対称性の研究)を結びつけるものとして、上記リーマン・ヒルベルト対応が用いられている。この業績は、表現論を幾何と関連させて研究する大きな潮流の嚆矢となった。

同教授は、1988年に朝日賞(河合氏との共同受賞)および学士院賞を受賞し、2002年にはパリ科学アカデミー外国人会員に選ばれるなど、一連の仕事は国内外で大きな評価を受けている。今回の学士院会員への選定は、これまでの同教授の一連の業績が評価されたものであり大変喜ばしい。

(数理解析研究所)

日誌 2007.12.1 ~ 12.31

- | | | | |
|-------|-------------|-----|--|
| 12月4日 | 部局長会議 | 19日 | 国際交流委員会 |
| 10日 | 役員会 | 21日 | 名誉教授称号授与式 |
| 11日 | 環境・安全・衛生委員会 | 〃 | 総長主催外国人研究者との交歓会 |
| 〃 | 施設整備委員会 | 25日 | 全学共通教育システム委員会 |
| 14日 | 学生部委員会 | 〃 | KUINS 利用負担金検討委員会 |
| 〃 | 図書館協議会 | 〃 | 京都大学・慶應義塾大学・東京大学・早稲田大学による大学院教育における大学間学生交流に関する協定調印式 |
| 17日 | 財務委員会 | 26日 | 企画委員会 |
| 18日 | 教育研究評議会 | | |
| 〃 | 役員会 | | |

訃報

このたび、^{た だ み ち た ろ う} 多田道太郎名誉教授、^{う え や な ぎ か つ ろ う} 上柳克郎名誉教授が逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

以下に両名誉教授の略歴、業績等を紹介いたします。

多田 道太郎 名誉教授



多田道太郎先生は、平成19年12月2日逝去された。享年83。

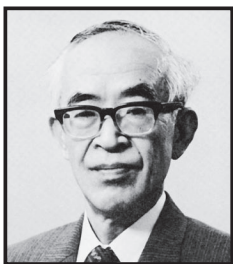
先生は、昭和24年3月京都大学文学部文学科を卒業後、同24年12月京都大学人文科学研究所助手に任ぜられ、同32年同講師、同40年同助教授を経て、同51年同教授に昇任、西洋思想研究部門を担当した。昭和63年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。また退官と同時に明治学院大学国際学部教授に就任、その後は武庫川女子大学教授、神戸山手大学環境文化研究所所長を歴任された。

先生は戦後まもなく人文科学研究所において桑原

武夫教授が開始された「ルソー研究」以来の一連の共同研究に参加するとともに、自身でも「ボードレールの研究」を主宰され、その成果は『悪の花注釈』（全2巻）として公刊され、フランス学会で高い評価を受けた。また、『クラウン仏和辞典』の編纂に従事し、その功績により昭和53年には毎日出版文化賞を受賞された。こうした仕事に加えて、ファッション、しぐさ、遊びなど、日本人の日常文化にも多大かつ広範な興味を示し、多数の著書を残すとともに、昭和51年からは「現代風俗研究会」を主宰して、この方面での後進研究者の育成をはかった。その著作のほとんどは現在『多田道太郎著作集』（全6巻）で読むことができる。

（人文科学研究所）

上柳 克郎 名誉教授



上柳克郎先生は、平成19年12月7日逝去された。享年85。

先生は、昭和18年京都帝国大学法学部を卒業され、同大学院特別研究生、法学部講師、同助教授を経て、同29年京都大学法学部教授に就任された。昭和60年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和39年3月から同41年3月まで京都大学評議員として、昭和44年4月から同年12月まで学生部長として、昭和49年10月から同51年10月まで法学部長兼評議員として、学内行政に尽力された。本学退官後は、平成9年3月まで大阪学院大学法学部教授（平成元年

10月から同5年9月までは同大学法学部長）として、同大学の研究教育体制の整備充実に多大の貢献をされた。

先生は、現実の紛争解決に役立つ実用法学としての商法学の確立に大いに貢献され、その独創的かつ説得力のある学説の多くは、その後の学問的発展の出発点を形成した。また、学外においては、司法試験審査委員、法制審議会商法部会委員を務められ、昭和49年以降の商法の抜本的改正作業において中心的な役割を果たされた。これら一連の教育研究活動により、平成9年4月に勲二等旭日重光章を受けられ、平成10年12月に日本学士院会員（第1部第2分科）に選定された。

（大学院法学研究科）

お知らせ

平成19年度防災研究所研究発表講演会

1. 日 時：2月28日(木) 9：20開会
2月29日(金) 9：20開会
2. 会 場：京都テルサ(京都市南区東九条下殿田町70番地) J R 京都駅から南へ徒歩10分
3. 参 加 費：無料
4. プログラム：
 - 2月28日(木) 9：20 開会の辞 防災研究所長 石原 和弘
 - 特別講演 9：25-11：55
 - 9：25 建築・防災の先端技術と伝統技術の確立を目指して
防災研究所 教授 鈴木 祥之
 - 10：10 大地震に学ぶ内陸地震の発生機構と不均質構造
防災研究所 教授 伊藤 潔
 - 11：10 都市域とその周辺における大気微量成分の気候学
防災研究所 教授 岩嶋 樹也
 - 災害調査報告 13：30-14：50
 - 13：30 2007年新潟県中越沖地震発生後の新潟県災害対策本部における状況認識の統一
防災研究所特別研究員(生存基盤科学研究ユニット助教) 浦川 豪
 - 13：50 2007年能登半島地震-強震動の特徴と地震災害-
防災研究所 教授 岩田 知孝
 - 14：10 2007ソロモン諸島地震津波災害の被害と社会の対応
防災研究所 准教授 牧 紀男
 - 14：30 バングラデシュに襲来したサイクロン“Sidr”による被害について
防災研究所 准教授 林 泰一
 - ゲスト講演 15：00-15：30
 - 15：00 気候変動予測研究の現状と今後の展望
気象庁気象研究所予報研究部 部長 杉 正人
 - 一般講演 15：45-19：15
- 2月29日(金)
 - 一般講演 9：20-11：35 14：00-17：30 ポスターセッション 9：00-17：00 発表 11：30-14：00
5. 問い合わせ先 京都大学宇治地区事務部研究協力課
E-mail：uji.sien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp TEL：0774-38-3352 FAX：0774-38-3369
詳細はホームページをご覧ください。http://www.dpri.kyoto-u.ac.jp

隔地施設 紹介



フィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所 (<http://www.maizuru.marine.kais.kyoto-u.ac.jp/>)

舞鶴水産実験所はフィールド科学教育研究センター里域生態系部門に所属し、若狭湾西部の舞鶴湾奥部に位置します。京都府のほぼ北半分を流域とする由良川が、舞鶴水産実験所の西方約8kmの地点で若狭湾に注ぎ、その源流はフィールド科学教育研究センター芦生研究林に発します。フィールド科学教育研究センターの教育・研究の柱である「森里海連環学」の推進において、舞鶴水産実験所は由良川流域を舞台として中核的な役割を果たしています。



舞鶴水産実験所の全景

完成した「研究棟」と「飼育棟」が主たる建物です。そのほかに、艇庫、船具庫、工作庫、飼育水濾過庫、舟艇用栈橋、海洋観測用栈橋などを有します。また、実験所内には樹齢70年を超える桜の木や小さな林もあり、花と緑に囲まれた環境です。天然の良港といわれる舞鶴湾内にあるので、年間を通じて実験所前の海域は穏やかです。しかし、舞鶴湾を出ると冬季には季節風の影響で荒れる日も多くみられます。実験所前の水温は晩冬に最も低く10℃前後、夏の終わり頃には25～28℃まで上昇します。



水産生物標本館

水産生物標本館は博物館法の指定を受け、世界中から採集された魚類標本約30万点3,000種が保管されています。これは日本でも2番目に大きいコレクションであり、魚類分類学の発展に貢献してきました。飼育棟は4つの恒温室と大型水槽室からなり、マアジ、カタクチイワシ、ヒラメ・カレイ類、マダイ、アカアマダイ、トラフグ、アユなどの仔稚魚、エビ類、アミ類、ミズクラゲ、ユウレイボヤなど、毎年10種を越える海産生物を対象に飼育実験が行われています。また、屋外の大型水槽では、カタクチイワシなどの親魚を飼育し、自然産卵された卵を飼育実験に用いることができます。海洋調査と実習のために、緑洋丸(定員30名, 18トン)、白浪丸(定員7名, 4.4トン)、船外機付きボート3艇などを保有しています。うち船外機付きボート1艇は、由良川河口に係船され由良川調査に利用されています。スキューバダイビング機材も整備されており、資格と潜水経験などの条件を満たす利用者は、実験所周辺で潜水調査を行うこともできます。実験所近くの水深7mの海底には、森里海連環学の一環として芦生研究林の木で製作した間伐材魚礁が配置され、たくさんの魚類を観察できます。宿泊棟には、ベッド8個の宿泊室が5部屋、教員ならびに外来研究者用宿泊室が3部屋、2つの浴室等を備え、実習生、大学院生、外来研究員が長期間滞在することができます。食堂施設も設置されており、4月から10月まで昼食と夕食のサービスを受けられます。

沿革 舞鶴水産実験所は、昭和22(1947)年4月に京都大学農学部水産学科が京都府舞鶴市長浜に設置されたことに始まります。昭和47(1972)年、水産学科が京都市内の農学部に移転したことに伴ってその施設を転用し、同年に農学部附属舞鶴水産実験所となりました。平成10(1998)年には、大学院重点化に伴い農学研究科附属舞鶴水産実験所と改称され、平成15(2003)年4月に、フィールド科学教育研究センターの発足とともに全学共同利用施設となりました。

施設と環境 敷地は約2ha、鉄筋コンクリート3階建ての「水産生物標本館」、同2階建ての「宿泊棟」、平成14(2002)年に完

成した「研究棟」と「飼育棟」が主たる建物です。そのほかに、艇庫、船具庫、工作庫、飼育水濾過庫、舟艇用栈橋、海洋観測用栈橋などを有します。また、実験所内には樹齢70年を超える桜の木や小さな林もあり、花と緑に囲まれた環境です。天然の良港といわれる舞鶴湾内にあるので、年間を通じて実験所前の海域は穏やかです。しかし、舞鶴湾を出ると冬季には季節風の影響で荒れる日も多くみられます。実験所前の水温は晩冬に最も低く10℃前後、夏の終わり頃には25～28℃まで上昇します。



海洋調査と実習で活躍する緑洋丸



研究・教育 魚類仔稚魚を中心とした海洋生物の生態学的研究では、我が国を代表する研究拠点として、この分野の中心的な役割を果たしてきました。とくに、魚類の資源量を決定する仔稚魚期の生き残りの機構について、フィールド調査と飼育実験により多くの研究成果を報告していま



由良川流域での河川調査

す。また、由良川流域をフィールドとして、森-里-海の生態的なつながりを解明する「森里海連環学」研究を積極的に進めています。河口・沿岸域の生物生産力と生物多様性に対する森林や人間活動の影響について、多様な視点から知見が蓄積されつつあります。

本実験所に所属する農学研究科里海生態保全学分野の大学院生だけでなく、農学研究科や情報学研究科の大学院生、農学部4回生、他大学の大学院生などが、研究課題を持って本実験所を利用し、飼育実験やフィールド調査を行っています。また、本実験所で開催される実習として、平成19年度には15のプログラムを実施しました。本学学生対象としては、農学部プログラムの「海洋生物科学技術論と実習」、全学共通科目の「森里海連環学実習 A」が主なものです。後者は、芦生研究林内の源流から舞鶴市内の河口まで、由良川流域の環境と生態系の変化を1週間かけて調べるという、他に例のないユニークな実習です。本学の実習だけでなく、他大学の実習も積極的に受け入れているほか、科学技術振興機構のサイエンス・パートナーシップ・プロジェクト(SPP)など、高等学校との連携プログラムにも力を入れており、平成19年度には5校の実習指導を行いました。



舞鶴市小学生自然科学教室

社会連携 舞鶴市は京都北部・若狭湾地域の中心都市であり最大の漁業基地です。行政機関、漁業者、住民などからの求めに応じて、環境の保全や地域産業の活性化のために積極的な助言を行ってきました。また、地域の催しに協力するほか、小・中・高等学校の教員・生徒に対して講義や実習を行っています。主な地域との連携活動は、京都府と共同で開催する由良川フォーラム、京都府ふるさと海づくり大会、舞鶴商工会議所まいづるフェスタ、舞鶴市ネイチャーガイド養成講座、NPO主催の自然観察講演会、学校出前講座、小中学校科学探偵士など多数あります。

年間の利用者数は5000人を超えますが、実習で混み合う夏季を除くと宿泊棟にも余裕があります。全学のさまざまな分野の研究室のゼミ合宿なども歓迎いたします。

〒625-0086

京都府舞鶴市長浜

電話：0773-62-5512 FAX：0773-62-5513

E-mail：maizuru@adm.kyoto-u.ac.jp

http://www.maizuru.marine.kais.kyoto-u.ac.jp/

職員構成

教員5人、事務職員1人、技術職員2人、時間雇用職員5人、外国人特別研究員1人、大学院生12人（うち外国人留学生4人）、学部学生2人

アクセス

- ・京都駅からJR西日本を利用して特急の直行なら約1.5時間、綾部乗り換えなら約2時間、東舞鶴駅下車後タクシーで15分。
- ・京都駅から京都交通のバスで約2時間、中舞鶴バス停下車後徒歩15分。



宿泊棟